③　「共に生きる力」（自己実現）

「生きようとする力」や「活かす力」は，子ども一人一人が「人間として意味深く生きていく力」の要素として極めて大切であるが，これが自己中心的な，排他的な姿勢で生きている場合には，多くの問題の要因になることが多い。「生きる力」の要素として，最も重視しなければならないのは，「共に生きる力」である。

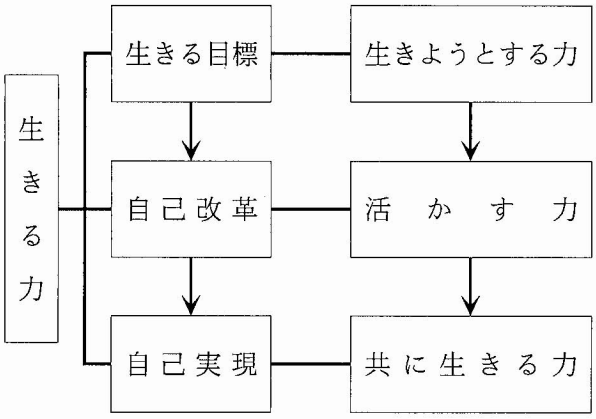
研究課題設定の背景においても繰り返し述べてきた「子どもたちの生活の現状」にかかる問題の多くは，この「共に生きる力」の弱さに起因していると考えることができる。少子化や群れ遊びの減少，家庭における一人遊びの時間の増加など，子どたちが他との摩擦の少ない環境に置かれていることは，人間関係をつくる力を弱めていると考えることができる。「共に生きる力」は，人間関係をつくる力であり，「生きる力」の内容としておさえた「自己実現」は，「共に生きる力」の育成の問題として考えていきたい。学校は，その集団で学習することの特色を生かして「共に生きる力」を育む教育を，学校の全教育活動を通して積極的に推進していかなければならない。

以上，学校教育の中で育てなければならない「生きる力」に関する３つの要素を述べてきたが，これらは，個々に育てられるものではなく，相補的・総合的に育てていかなければならないと考える。

⑶　「生きる力」としての「学力」を育てる

「生きる力」を育てることは，子どもたち一人一人が「生きる目標（生きがい）」を持ち，「自己改革」の方法を学び，「自己実現」の充実を味わえるようにすることである。これを先の「生きる力」の要素と結びつければ，右上の図のようになる。

つまり，生きる目標を持たせるための「生きようとする力」，自己を改革するための「活かす力」，自己実現のための「共に生きる力」であると考えることができる。



さて，この研究では，サブ・テーマにも表現しているように「生きる力」としての「学力」を育てる主たる場を「授業」に限定している。

授業の中で「生きる力」としての「問題解決力」，「豊かな人間性」，「健康や体力」を総合的に育てることを次のように考えてみる。

例えば，「生きる力」としての「問題解決力」を育てる場合，まず配慮すべきことは，子どもの意欲を大切にすることである。

生きようとする力を突き動かすのは，生きる目標（生きがい）であると先に述べた。これは子どもたを学習に突き動かす力でもある。この意欲をもって学習に取り組む体験を繰り返すことによって，子どもたちには，目標を持つことの大切さやそのために努力することの意味が理解されてくる。

従って，教師は，これまで以上に子ども一人一人の学習ニーズの把握に努めるとともに，子どもたちにとって魅力のある教材の開発にも力を注ぐことが大切であり，子どもたちが問題解決に生き生きと取り組むための基盤としての学級の人間関係にも十分留意し，共に学ぶことで感動が得られるような学習活動を工夫していくことが必要になってくるのである。

子どもたちにとっての生きる目標（生きがい）は，学校への「行きがい」でもある。学校で過ごす時間のほとんどが授業であれば，授業に何かしら子どもたちを魅き付けるものがなければ，学校への「行きがい」は半減してしまうに違いない。

子どもたちの学校への「行きがい」となるような